

2018年度日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会 優秀演題賞（口頭部門・ポスター部門）

○優秀演題賞（口演部門）筆頭者のみ

竹中晃二先生（早稲田大学人間科学学術院）

「メンタルヘルス・プロモーション冊子の配布による認知的効果」

現在、メンタルヘルス問題は、地域、職域、学校において対処が必要な喫緊の課題となっています。しかし、その予防、さらには予防を超えるプロモーション活動についてはほとんど行われていません。本研究では、「こころのABC活動」と名付けたメンタルヘルス・プロモーションについての普及・啓発冊子を配布し、行動変容の観点で効果を確認しました。今後は、メンタルヘルス・プロモーションで推奨できる自助方略の検討、そして臨床ステージング・モデルにのっとりして閾値下（非臨床）の抑うつ症状低減効果についても研究を膨らませていきます。



矢口明子先生（国立がん研究センターがん対策情報センターがん情報提供部）

「医薬品のリスクコミュニケーションのための患者向け資料の有用性評価指針の検討：第1報有用性評価」

医薬品の重篤な副作用を回避するために、患者・国民に対し、リスクとベネフィットに関する適切で有用な情報提供が必要ですが、我が国ではその科学的な検証はなされていません。そこで、本研究では、米国で開発された患者や一般向け情報の評価指針である CDC Clear Communication Index（CCI）を用い、現在発出されている患者向け安全性速報とその関連資料の評価を行いました。その結果、CCIにより簡便に資料の評価を行うことができましたが、限られた紙面で迅速に作成される資料に対しては必要でない項目があり、さらなる検討が必要と考えられました。



○優秀演題賞（ポスター部門）筆頭者のみ

秋山美紀先生（慶應義塾大学環境情報学部）

「スマートフォンを用いた在宅高齢者・療養患者の食生活支援～コミュニケーションプログラムの開発と実証～」

高齢者や在宅療養中の患者は、日々の食事について悩みを抱えていることが報告されています。そこで本研究は、スマートフォンで食事の記録や相談ができるプログラムを開発し、実証実験により運用可能性を検討しました。操作方法の説明後、練習期間をおいてから、参加者は毎食の写真を5日間アップロードし、管理栄養士が食事バランスの評価と動機付けにつながるコメントを毎日1～2回の頻度で返信しました。本プログラムは、高齢者や療養中の患者にとって新しいチャレンジの機会と食生活の改善のきっかけとなることがわかりました。



金子絵里奈先生（福岡市薬剤師会薬局七隈店）

「薬局疑義照会における内容分析および情報源との関連性」

薬剤師は患者への医師の処方に対し、その内容をチェックし、問題があれば問い合わせ（疑義照会）しなければなりません。これまで薬剤師が問題の発見に至る情報と照会内容および情報源との関連はわかっていませんでした。本研究により、患者との対話から得られる情報が患者-医師間の認識に相違があり、医薬品の誤った投与や副作用の防止、投与日数の変更、および服薬状況の改善と関連していることがわかりました。薬剤師がコミュニケーション能力を向上させ、患者との円滑な対話ができれば、よりの確な疑義照会が行えるようになると思います。

